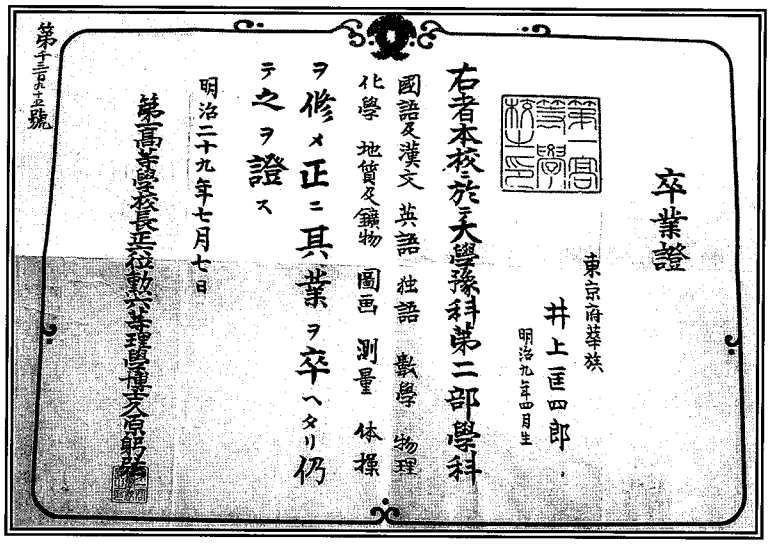
ISSN 0915-3284

東京大学史史料室ニュース

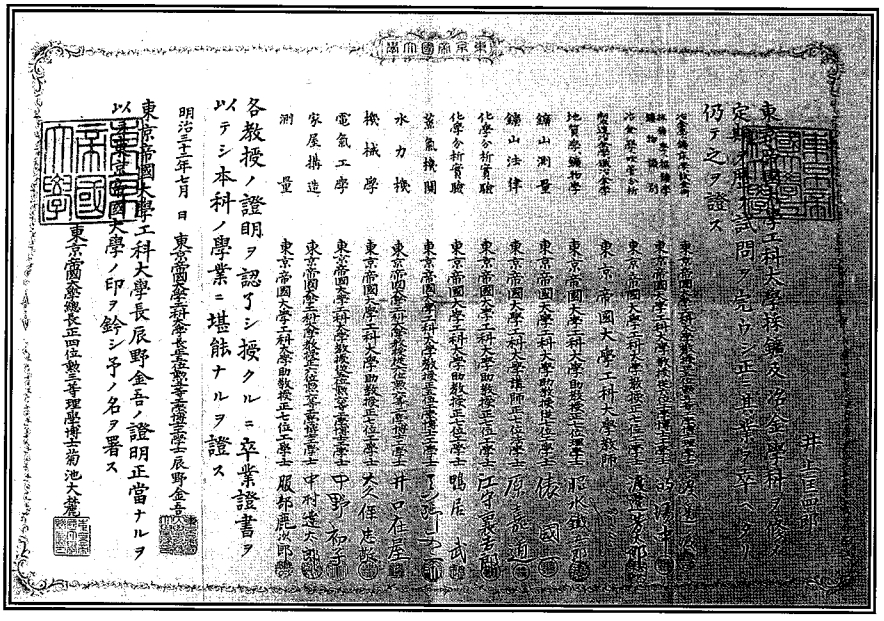
第36号　2006・3・31

目　次

旧制高専校史料の公開と活用—東北大学の場合— ……2
本郷キャンパス史の探訪：育徳園丘上の碑と赤門鬼瓦の「學」に関して ……5
受贈図書一覧 ……7
史料室日誌抄録 ……8


卒業證
東京府華族
井上匡四郎
明治九年四月生
右者本校ニ於テ大學豫科第二部學科
國語及漢文　英語　独語　數學　物理
化學　地質及鑛物　圖画　測量　体操
ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍
テ之ヲ證ス
明治二十九年七月七日
第一高等學校長正位勲六等理學博士久原躬弦
第三百五十五號

（漆原邑子氏より寄贈、井上匡四郎卒業證書２点）


東京帝國大學
井上匡四郎
東京帝國大學工科大學採鑛及冶金學科ヲ修メ
定規ノ學科試問ヲ受ケシ上其業ヲ卒ヘタリ
仍テ之ヲ證ス
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　原口忠次郎
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　渡邊茂
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　服部漢次郎
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　肥水敏
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　俵國一
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　原敬造
東京帝國大學工科大學講師正七位工學士　原敬造
東京帝國大學工科大學助教授正七位工學士　江木長善
東京帝國大學工科大學助教授正七位工學士　鴨居武
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　井口在屋
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　大久保彦
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　中野初子
東京帝國大學工科大學教授正七位工學士　中村達太郎
東京帝國大學工科大學助教授正七位工學士　服部漢次郎
各教授ノ證明ヲ認ムシ授クルニ卒業證書ヲ
以テシ本科ノ學業ニ堪能ナルヲ證ス
明治三十年七月　日　東京帝國大學工科大學長辰野金吾
東京帝國大學工科大學長辰野金吾ノ證明ヲ當ナルヲ
以テ東京帝國大學ノ印ヲ鈐シ予ノ名ヲ署ス
東京帝國大學總長正四位勲三等理學博士菊池大麓

旧制高専校史料の公開と活用—東北大学の場合—

永田英明

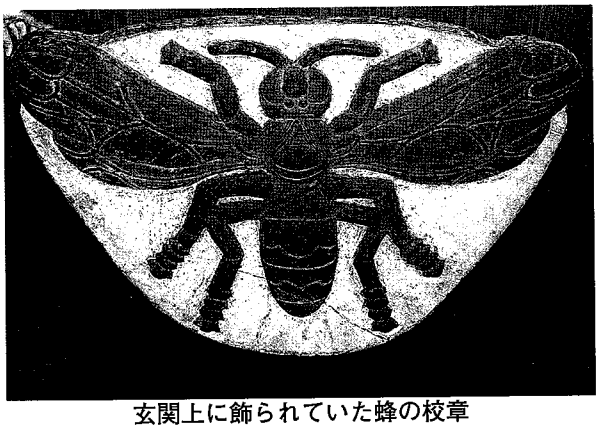
東北大学史料館における二高史料の収集過程

東北大学では、包括・併合した旧制諸学校の史料について、同窓会組織と連携しつつ大学アーカイヴズ（史料館）を拠点とした形での収集を行ってきた。その中核をなすのが、第二高等学校（以下「二高」）の関係史料である。

現在東北大学史料館に収蔵されている二高関係史料は、伝来のあり方から基本的に以下の三種に大別できる。

第一は、戦後二高尚志同窓会に継承され、1974年に「二高記念資料」として大学に寄贈された史料群である。現存する旧制高校の校旗中最も古いと言われる1905年製作の蜂章旗、生徒自ら作成したという校舎正面玄関上に飾る木彫りの蜂章、安井曽太郎の代表作「T先生の像」を含む歴代校長の肖像画、さらには校友会組織である尚志会や各部の記念品、二高を代表する寄宿舎・明善寮の記録類など、二高に関するシンボリックな史料がここに含まれる。同窓会からの史料寄贈は以後も数度にわたり行われているが、基本的にはこの時の受入史料が中心をなしている。

この「二高記念資料」は、もともと旧二高の校舎を引き継いだ東北大学の教養部内で保管されていたものである。これが1974年という時期に同窓会から大学へという形で寄贈されたのは、いわゆる「大学紛争」を契機としている。1969年、史料の保管場所となっていた教養部事務棟が長期間にわたって学生に占拠され、同窓会関係者と学生側の交渉の末ようやく学外に史料を緊急避難させるという事件が起こった。その後同窓会では独自の史料室設置なども議論したようだが、最終的には、当時附属図書館本館内に居を構えていた「東北大学記念資料室」（東北大学史料館の前身）に移して保存管理することとなったのである。記念資料室は、『東北大学五十年史』の編纂を契機に1963年に設置された東北大学のアーカイヴズ施設であり、二高その他の包摂校史料も当時から収集の対象に掲げていた。



玄関上に飾られていた蜂の校章
戦後の新校舎に飾るべく、生徒の手で彫られたもの

こうした「記念資料」が比較的早くから当館に収められていたのに対し、近年ようやく移されるようになった第二の史料群が、二高の公文書である。これらは情報公開法の施行等を契機とした本学における近年の歴史的公文書移管制度の整備に伴い、情報公開法の適用対象から外れた歴史的公文書として移管されてきた。二高は1945年7月10日の仙台空襲によって戦前期の多くの記録を失ったが、その際優先的に救出されたと思われる明治期以来の学籍・成績や人事に関する記録が残され、また戦中期の勤労動員や学徒隊、戦災への対応に関する記録なども残されているなど、二高の姿を知る骨格となる記録は残されている。

そして、これらを補完するものとして集積されてきたのが、旧職員や卒業生等からの寄贈史料である。当初は記念展の開催時に同窓会が収集した史料を展示終了後大学に寄附する、というケースが主であったが、近年では大学が卒業生等から直接寄贈を受けるケースも多い。書簡や写真、受講ノートや徽章などのほか、個人の手で保管され伝えられた部・寮の記録等が寄贈されることもある。殆どが数点単位の寄贈であり個々の文書群の規模は小さいが、これらが全体として二高の教職員・学生生活に関するコレクションを形成し、第一・第二の史料群に欠けている部分を補完していると言えよう。

このように、二高の場合、以上の三種類の史料がいずれも東北大学史料館に蓄積されている。旧制高校史料の保存については、いくつかの機関に分散保存されているケースも少なくないと聞くが、二高の場合は大学への集約度がかなり高いものと思われる。もちろんこれは同窓会組織の熱心な協力、同窓会と大学アーカイヴズの緊密な連携のなすところである。

二高史料の公開と活用

さて、このようにして蓄積・集約されてきた二高史料は、これまで主に「展示」という形で公開されてきたと言って良い。「二高記念資料」が大学に寄贈されて以降、創立九十周年（1976）、百周年（86）、百十周年（96）とほぼ十年おきに同窓会中心の大規模な「二高史料展」が開催されており、また86年以降は当館の常設展示でも一部の史料が展示されている。

しかしこうした展示による史料公開とともに、私たちが現在力を入れているのが、二高史料の閲覧環境を

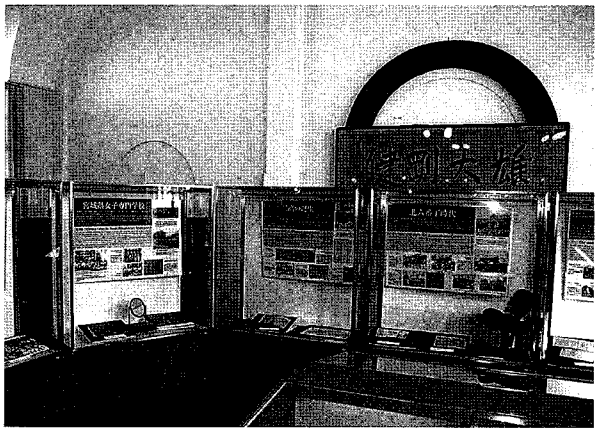
整備することである。具体的には、東北大学史料館で所蔵する二高関係の文書・雑誌のマイクロフィルム化、写真のデジタル化を進めている。ちなみにこの事業は、二高尚志会の創立１２０周年記念事業の一つとして、同会の全面的な協力の下に進められていることを申し添えておく。

既にその成果も出始めており、2004年度には校友会誌である『尚志会雑誌』をはじめとする二高刊行物のマイクロフィルム撮影が完了し、同時に「第二高等学校関係刊行物データベース」をインターネット上で公開して目次レベルでの検索がWeb上でできるようになった。同じく二高の各部・寮日誌についてもマイクロ化が終了しており、いずれ目録を公開する予定である。写真についても既に330点ほどが「東北大学関係写真データベース」のなかで公開されており、さらに公開点数を増やすべく現在準備を進めている最中である。このように、マイクロ化・デジタル化等による閲覧用資料を整備し史料保存と公開を両立できる環境を整え、同時にインターネット等を活用したこれらの史料情報の積極的な提供を行うことで二高史料の活用を促進していく。そのための基盤整備を進めている最中である。

旧制高校を知らない世代が、自分たちの視点で旧制高校にまつわる事実を把握し直し、これを歴史的存在として位置づけ直していくためには、いうまでもなく、利用者が当時の多様な史料に直接アクセスできる環境を整えていくことが欠かせない。実際、前述のデータベースの公開以降史料閲覧者の数は着実に増えており、今後のさらなる充実によっていっそうの効果が期待できると考えている。

「学都」仙台のなかで…

1886年から87年にかけ全国五つの高等中学校が設置されたとき、各校にはそれぞれ「本部」のほかに「医学部」が併設されていた。その際、二高（仙台）では、四高（金沢）とともに、同一の都市、同一の敷地内に両者が設置された。1901年に医学部が「仙台医学専門学校」として独立してからも、その校舎は明治期を通じて二高の敷地内にあり、二高と並ぶ、明治期仙台を代表する高等教育機関であった。



史料館内の包摂校展示コーナー
「雄大剛健」の扁額は二高明善寮の講堂に飾られていたもの。
「史記」研究者として著名な瀧川亀太郎教授の筆。

二高医学部および仙台医学専門学校の関係史料の残存状況は、前記の二高史料とは全く対照的である。同校は東北帝国大学医科大学の開設に伴い1918年に廃止され、同窓会組織も既に戦前期に、帝大医学部同窓会に吸収される形で消滅している。こうした経緯もありいわゆる「記念資料」や同窓生の個人史料はわずかしか伝えられていない。しかしその一方で豊富な公文書が残されており、「仙台医学専門学校文書」として当館に収められている。

仙台医専文書の調査・整理は、実は当初は同校で留学生活を送った若き日の魯迅（1881～1936）の在籍記録さがしから始まった。1979年に当館に移管されて以後も、その活用は主として魯迅に関する展示会等に限られていた。しかし学籍・人事関係の他、教官会議や入学・卒業に関する書類、学内外での各種行事に関するものや文部省・軍との往復書類など実に豊かな内容を含むこの史料群は、明治期における医学教育や医学生の実態を知る絶好の史料群として、今後大きな可能性を秘めていると思われる。こうした観点から当館では同文書を1998年にマイクロフィルム化し、目録と共に既に一般公開を行っている。

医学部（仙台医専）と二高本部（大学予科）の間には、少なからぬ気風の相違があり、それが往々にして生徒同士の対立事件を招いたと伝えられているが、いずれにせよ明治20、30年代において、医学部や「医専」が二高とともに仙台を代表する学校であったことは間違いない。明治30年代の末には既に二高生の間で仙台を「最善最美なる日本唯一の学都たらしめよ」とする主張が行われているが（舞鳶生「学都たらしめよ」『尚志会雑誌』67号（1905年））、それは二高や医専の学生として各地から集う学生人口の増加を踏まえてのことであった。同時期の二高公文書は前述のように多くが失われてしまっているが、残された明治期の二高史料と、この医専公文書を総合することで、明治期の仙台における高等教育や学生たちの姿をより豊かな形で復原していくことが可能となるであろう。

また仙台ではその後、1906年に仙台高等工業学校が、1911年に東北帝国大学理科大学が開設され、東北帝大に四学部が完備したあとの1925年には更に県立の女子専門学校も設置された。このようななかで「学都仙台」という語も東北帝大を中核とする形に再編され定着していった。仙台高工も宮城女専も、戦後学制改革の過

程ですべて東北大学に包括・併合されている。二高同様これらの学校でも同窓会組織を中心に関連史料の保存や収集が進められ、当館に既に寄贈されている史料も少なくない。同窓会組織の縮小や解散を前にこれらを大学に集約する動きもいっそう強まっているが、これらの学校の史料群もまた、個々の学校の歴史という枠を越えて、仙台という都市における高等教育や学生文化の実像を探る史料としても、興味深い内容を持っている。これらを、近代高等教育の実態、学都仙台や東北大学の歴史に関する認識を共有するよりどころとして活用するためにも、二高史料同様、より多くの方々が史料を閲覧できる体制を整備していく必要があろう。大学アーカイヴズである当館の一義的な役割もまずこの点にあると考える。

同時に、東北大学自身がこれらを活用し、東北大学の「もう一つの源流」のすがたを示していくことも欠かせない。東北大学史料館では、平成17年春から常設展示を更新し新たに「歴史のなかの東北大学」と題して公開を開始した。展示の中心が東北大学の歴史にあることはいうまでもないが、二高をはじめとする諸学校についてもコーナーを設けている。もっとも現在の展示は学校ごとの縦割り型の展示紹介で、まだまだ改善の余地があると考えている。展示を充実させていく中で、各々の学校の個性とともに、諸学校によって形成されていく「学都・仙台」の風景を再現できればと考えている。

（ながた　ひであき　東北大学史料館研究員）

本郷キャンパス史の探訪：育徳園丘上の碑と赤門鬼瓦の「學」に関して

細谷恵子・谷本宗生

東京大学本郷キャンパスは、江戸時代には加賀藩、水戸藩、富山藩、大聖寺藩の屋敷地であったことはよく知られています。そしてその史跡も数多く残っています。今回は広報センターなどでよく質問される歴史的な事柄の中から、特に2つの本郷キャンパスの不思議についてお話ししていきます。いつの日かこれらが明らかとなり本郷キャンパスの魅力がさらに増し、キャンパス案内や探訪がより充実していくことを願っています。

一、育徳園丘上の碑

この石碑は、三四郎池（育徳園心字池）南側丘上の、池を一望できる高台に位置しています。石碑の表面には楷書で148の文字が刻まれ、富山藩邸にあった仏像について記してありました。碑文の解釈は文学部国文学研究室の姫野助手（元）にお願いしました。

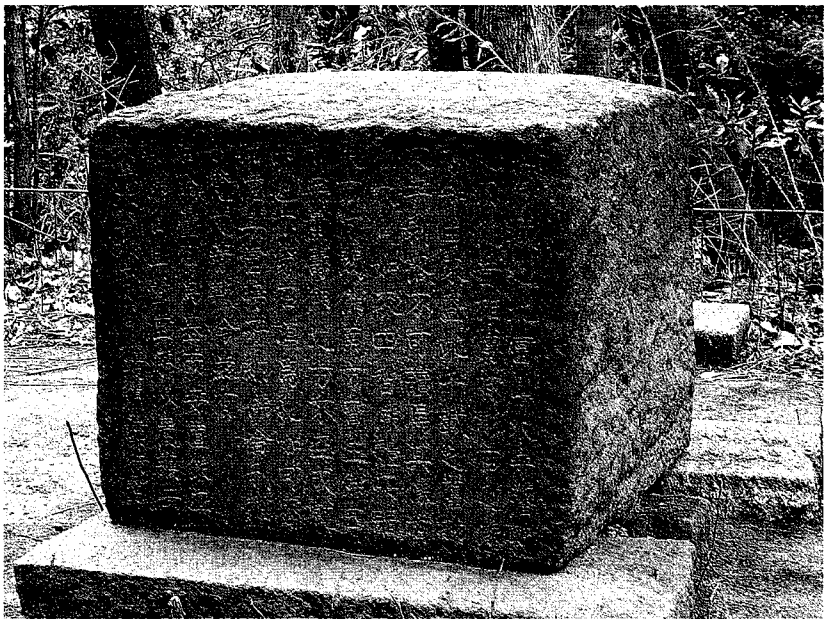
碑銘は天保4年に権大僧都法印行智という僧が残しました。中里龍雄氏によると、行智は江戸浅草覚吽院の修験者、かつ、十代富山藩主前田利保の師であり、また、碑文が書かれた天保4年は富山藩にとって甚だしい凶作の年であったとされています（「行智の事蹟断想」、『帝国大学新聞』（昭和6年12月21日付第412号）より）。

碑文に言及されている仏像は、「大日如来四智仏体」で、これを君主の命令により堂舎に安置するとあります。そしてこの四智仏とは、いわゆる、東方の阿閦仏、南方の宝生仏、西方の無量寿仏、北方の不空成就仏であると記されていますが、金剛界曼荼羅に表された如来ではないでしょうか。

これらの仏像と今ある石碑が、当時どのような形で置かれていたのかはわかりませんが、仏像一体一体が並んでいたとか、石塔の塔身部のように立方体の四面に四智仏が刻まれていたなどが考えられます。

その手がかりになりそうなのが、文京ふるさと歴史館『わたしの文京アルバム』（平成9年）に掲載された1枚の写真です。昭和3年に撮られたこの石碑の上部には高さ70センチ位の石が載っているのがわかります。残念ながら現在この石は無く（写真を参照）、さらに、前述した昭和6年の『帝国大学新聞』に掲載された石碑写真を見ると、この時すでに上部の石は無くなっています。石は果たして仏像であったのかが気になります。

ところで、この石碑はもともと富山藩邸にあったようですが、実は富山藩邸は大聖寺藩邸と隣り合わせに、現在の医学部附属病院側にあったのです。いつ頃、加賀藩邸である現在の場所へと移されたのでしょうか？石碑にはその事情を示すものはなく、記録も今のところ見つかっていないようです。どうして碑文を残した石碑だけがここにあるのか？それが1つ目の不思議です。皆さんも、機会があればぜひご覧になってはいかがでしょうか？



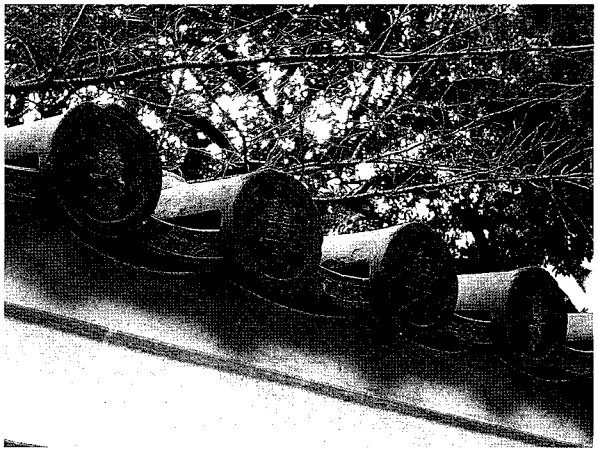
育徳園丘上の碑（大きさ：約タテ70×ヨコ70×高さ60cm）

二、赤門鬼瓦の紋所「學」

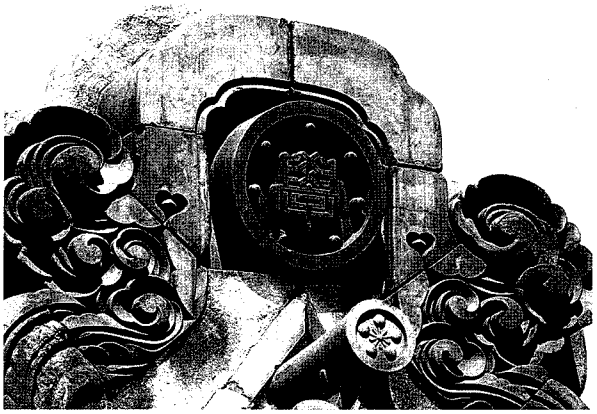
旧加賀前田屋敷の御守殿門である赤門は、明治9年に東京医学校（東京大学医学部前身）が本郷に移転してからその通用門として利用され、また東京大学の所有になってからは東大の代名詞となり、建立からおよそ180年経った現在では観光名所としても多くの人に親しまれています。形式は三間薬医門で重厚な屋根を冠しています。その屋根瓦の大棟には「三つ葉葵」、軒丸瓦等には「梅鉢」、そして大棟の鬼瓦には「學」の紋様が見られます。さて、2つ目の不思議は、鬼瓦の「學」はいつ付けられたのか？です。

『東京大学医学部百年史』（昭和42年）の年表によると、赤門の修繕は、明治36年「赤門位置換修繕」、大正15年「赤門修繕」、昭和36年「赤門保存修理」とされています。

そこで、明治36年に赤門が現在の位置へ15m程前方（西方）に移設された時の「東京帝国大学赤門位置替修繕工事仕様書」が、資産課に保管されていたので内容を確認しました。その資料の中に「大棟及同足元下リ棟共鬼瓦損傷ヲ生ジアルニ付波形絵様大寸等在来ニ倣ヒ紋所ハ下ケ渡ス可キ図面ノ通リ新規仕拵ヘ太銅線ニテ釣リ合セ～略～」と記述がありました。果たしてこの図面にはどのような絵様が示され、そして鬼瓦に取り付けられたのか？残念ながら図面は添付されていませんでしたが、修繕後の赤門を明治41年医学部卒業アルバム（医学図書館所蔵）で確かめることができました。正面右斜めから撮られたその写真には、鬼瓦にはっきりと「學」の文字が浮かび上がっていました。しかもそれだけではなく、降り棟の鬼瓦にも、軒丸瓦にも、妻側の丸瓦にも、そして塀の軒瓦（写真では一部を確認）まで「學」が刻まれていました。（このとき、番所の唐破風には巴紋様でした。また、赤門内北側の袖塀に今でも連なった「學」を見ることができます。）



赤門袖塀（構内北側）



赤門鬼瓦

これにより、明治36年の修繕の際には、鬼瓦の紋所に「學」が掲げられていたということがわかりました。

しかし、前述の工事仕様書で気になる箇所があります。「赤門軒先キ及妻共丸瓦ハ全部新規焼キ方致シ絵様ハ両袖塀ニ在来使用致シアル物ニ倣ヒ～略～」と記されているのです。在来に倣った絵様が「學」とするならば、明治36年より前、すでに「學」が用いられていたということになります。また関東大震災後の修繕を伝える『帝国大学新聞』（大正14年9月14日第129号）には、「30年程前の修繕の際、その梅鉢の中に「大學」と入れたりしたものだが」とあり、逆算すると明治28年頃を指します。大学を象徴する瓦が飾られた時期はさらに遡るのかもしれません。鬼瓦の「學」はいつから付けられたのでしょうか？

なお、現在見られる梅鉢紋ですが、先の新聞記事の続きに「この度補足する瓦は一番古い所をとって全部梅鉢紋章のつける」とあり、破損し新規に補足する軒丸瓦等は梅鉢の紋様に変えられたと思われます。（昭和3年医学部卒業アルバム（医学図書館所蔵）において、正面側の、赤門軒先と繋塀及び番所の唐破風に付けられた梅鉢紋を確認できました。）

赤門屋根瓦の変遷にもいろいろありそうですが、移りゆく時代と大学に関係するのでしょうか。また、戦前期に刊行されている学部別卒業アルバムの写真には意外な真実が隠されているように感じます。今後も、学友の皆さんとともに継続して調査していきたいと思います。

鴎外の『雁』や漱石の『三四郎』などを持って、本郷キャンパスを散策しながら、新たなキャンパスの不思議を見つけてみませんか？そんな歴史的魅力のある東京大学本郷キャンパスです。

（ほそやけいこ：広報センター）
（たにもとむねお：大学史史料室）

受贈図書一覧（抄）（平成17年10月～平成18年1月）

大学アーカイヴズ　No.33
　全国大学史資料協議会　平成17年10月

江戸東京博物館ＮＥＷＳ　vol.51,52
　東京都江戸東京博物館　平成17年9月,12月

開港のひろば　第90号
　横浜開港資料館　平成17年11月

Ouroboros　第28号
　東京大学総合研究博物館　平成17年11月

関東学院学院史資料室ニューズ・レター　第7号
　関東学院学院史資料室　平成17年10月

東北大学史料館だより　第5号
　東北大学史料館　平成17年12月

東北大学百年史編纂室ニュース　第10,11号
　東北大学百年史編纂室　平成17年3月,12月

京都大学大学文書館だより　第9号
　京都大学大学文書館　平成17年10月

大学史研究通信　第44号
　谷本宗生　平成17年11月

早稲田大学史記要　第三十七巻
　早稲田大学大学史資料センター　平成17年12月

学院史料　第二十号
　神戸女学院史料室　平成17年10月

中央大学百年史　資料編
　中央大学　平成17年10月

高等教育研究叢書　83,84
　広島大学高等教育研究開発センター　平成17年10月,11月

東京大学法学部　研究・教育年報　18
　東京大学法学部　平成17年10月

徳川記念財団会報　第6号
　徳川記念財団　平成17年11月

拓殖大学百年史　告辞編
　拓殖大学百年史編さん室　平成17年9月

慶應義塾福澤研究センター通信　第3号
　慶應義塾福澤研究センター　平成17年9月

一高同窓会会報　第381,382号
　一高同窓会　平成17年10月,12月

アーカイブズ　第21号
　国立公文書館、畑野　勇　平成17年9月

青淵　第六八〇～六八三号　平成17年11月～
　渋沢栄一記念財団　平成18年1月

東京大学学友会ニュース　4,5号　平成17年10月,
　谷本宗生　平成18年1月

緑丘アーカイブズ　第2号
　小樽商科大学百年史編纂室　平成17年12月

前田英昭コレクション 国会・昔と今－政治をもっと身近なものに－
　駒澤大学禅文化歴史博物館

大学左翼教授名鑑　2000名の先生と紛争と派閥
　谷本宗生　昭和44年6月

国立総合大学岡山設置計画書
　谷本宗生

東京帝国大学法学部卒業記念写真帖　明治44年卒業
　谷本宗生

神陵文庫別冊　三高記念室展示図録　自由の鐘
　三高自昭会三高記念室　平成17年8月

「学徒」たちの「戦争」～東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員～（ポスター）
　東北大学史料館

運命と摂理　一戦没学徒の手記
　谷本宗生　昭和22年4月

1968年には何があったのか　東大闘争私史
　谷本宗生　平成16年7月

日英交流の遺産ダイアー・コレクション研究（抜刷）
　加藤詔士（名古屋大教育学部）　平成17年10月

東京大学史料編纂所の国宝・重文名品展（チラシ）
　東京大学史料編纂所

同志社女学校・同志社女子大学で教鞭を執った先達たち展（ポスター）
　同志社女子大学史料室

戦後公教育の成立－京都における中等教育
　冨岡　勝（近畿大学教職教育部）　平成17年3月

層としての学生運動－全学連創成期の思想と行動
　谷本宗生　平成17年6月

東京大学創設期の体育（別刷）
　木村吉次（中京大学体育学部）　平成16年3月

今、教育の原点を問う
　江森一郎（金沢大学教育学部）　平成17年11月

東京大学等紛争関係資料（部内資料）
　谷本宗生　昭和44年2月

東大黎明期の学生たち-民約論と進化論のはざまで-展示資料目録
　桑尾光太郎　平成17年11月

本渡市立天草アーカイブズ年報　平成16年度
　本渡市立天草アーカイブズ　平成17年11月

東京帝国大学聴講将校研究報告　部外秘　第二號
　谷本宗生　昭和7年8月

天皇と東大　大日本帝国の生と死　上,下
　文藝春秋　平成17年12月

滝川事件
　谷本宗生　平成17年1月

東京大学教育学部民主化主要資料集　その二
　谷本宗生

立命館大学国際平和ミュージアム常設展図録（DVD付）
　立命館大学国際平和ミュージアム　平成17年12月

書簡が語る交流のあかし～信綱から一衛、そして照子へ～
　佐佐木信綱記念館　平成17年11月

聴取り調査：外地の進学体験（Ⅸ）（別刷）
　所澤　潤（群馬大学教育学部）　平成16年

日本のアーカイヴズ
　京都大学学術出版会　平成17年12月

銃後の社会史　戦死者と遺族
　谷本宗生　平成17年12月

「皇學館史展」展示解説書
　大平和典（皇學館館史編纂室）　平成17年10月

京都大学における「学徒出陣」（チラシ）
　京都大学大学文書館

一高百二十年記念寮歌祭（VHS）
　一高同窓会

史料室日誌抄録（平成17年10月～平成18年1月）

10月１日（土）　谷本・瀬川室員、個人情報研究会参加。
10月６日（木）　谷本室員、全国大学史資料協議会参加（慶応大学開催）。
10月27日（木）　谷本・小川室員、情報学環院生見学の誘導対応。
11月10日（木）　谷本室員、東北大学100年史編纂室員の見学対応。
11月17日（木）　谷本室員、土方ゼミの見学対応。
11月18日（金）　谷本・瀬川室員、ホームカミングデイ展示史料準備。
11月19日（土）　ホームカミングデイに史料出展。
　　谷本・瀬川室員、個人情報研究会参加。
11月25日（金）　谷本・瀬川室員、南原総長の五月祭史料の受入作業。
11月29日（火）～11月30日（水）
　　「東京大学史史料室ニュース」第35号刊行、発送。
12月13日（火）～12月14日（水）
　　谷本室員、大阪大学竹中氏の見学対応。
1月14日（土）　谷本・瀬川室員、個人情報研究会参加。

この間の閲覧者数
　学内者　11名
　学外者　15名

主な学外閲覧者所属機関
　京都大、東北大、横浜国立大学、大阪大、兵庫県立大

文献撮影・複写許可件数　９件
調査（照会）件数　53件

表紙の写真に関して
　表紙に掲載した卒業證書は、第一高等学校を明治29年に、東京帝国大学工科大学を、明治32年に、井上匡（ただ）四郎（明治9年生まれ）が、それぞれ卒業した際に授与されたもの。

題字　森　亘元総長

東京大学史史料室ニュース　第36号
発行日：2006年3月31日（年２回発行）
編集・発行：東京大学史史料室
東京都文京区本郷７－３－１
電話：03（5841）2077（直）
印刷所：株式会社 芳文社
東京都町田市1-18-18
Archives Section of the University of Tokyo